

『満文三国志』 満洲語における 三人称代名詞の単数形と複数形について

早田 清冷

キーワード：満洲語，単数と複数，三人称代名詞，集合名詞

要旨

満洲語の三人称代名詞の，所謂単数形 *i* と複数形 *ce* について『満文三国志』（1650 年序）を資料として分析を行った。以下の三点を指摘する。

- ・三人称代名詞単数形とされる *i* は単数にも複数にも用いられる。
- ・三人称代名詞複数形とされる *ce* は複数のみにも用いられる。
- ・*i* は，複数の人物（集合名詞である必要は無い）が一つの集団行動を行っている時だけ複数の人物を指せる。

0. はじめに

満洲語のいわゆる三人称代名詞は単数形が *i*，複数形が *ce* とされるが，複数形の使用頻度は極端に低い。この形式に関わる問題は（本当に三人称代名詞なのか等）多岐にわたるが，今回は，この形式の所謂単数形と複数形の使い分けについて『満文三国志』（1650 年）を資料¹ に選び分析を試みる。

1. 問題の所在

満洲語の人称代名詞は形態の上で，単数と複数の区別を持つ。三人称も例外ではない。満洲語の人称代名詞の一人称単数形 *bi*，二人称単数形 *si* は単数にしか用いられず，三人称もまた (1) の通りに単数形と複数形があるとされる。しかし先述の通り三人称複数形は使用頻度が極端に低い。『満文三国志』（1650 年）中の用例において三人称単数形 *i* が全曲

¹ 『三国志通俗演義』の順治年間の満洲語訳(1650 年序)を，本稿では『満文三国志』と呼ぶ。この文献は，岸田（1997：38）によれば，「嘉靖本に類似のテキスト」が原典であると考えられるので，嘉靖本『三国志通俗演義』の漢語も参照する。分析の際，キーワード前後文脈つき索引の作成に検索ソフトウェアとして木村(1998-2009)を用いた。『満文三国志』の電子化コーパスは全 24 巻中約 1 巻分を筆者が，残り約 23 巻分を早田輝洋氏が入力したものである。例文の分析の際には筆者が原資料を見て確認した。言うまでもなく全ての誤りは筆者の責任である。

用形合計で 1023 回²用いられているのに対して、三人称複数形 *ce* は全曲用形合計で僅か 36 回しか用いられていない。本稿では『満文三國志』(1650 年)の満洲語において、*i* と *ce* が単に単数と複数の違いであるという従来の記述で問題ないのか考察したいと思う。

(1) 満洲語の「三人称代名詞」³

	三人称単数		三人称複数	
主格	<i>i</i>	(39)	<i>ce</i>	(2)
属格	<i>ini</i>	(941)	<i>ceni</i>	(30)
対格	<i>imbe</i>	(30)	<i>cembe</i>	(1)
与位格	<i>inde</i>	(12)	<i>cende</i>	(3)
奪格	<i>inci</i>	(1)	<i>cenci</i>	(0)

(括弧内の数字は出現度数)

なお、今回用いた資料中の *i* の全格変化形 1023 例中の 941 例、*ce* の全格変化形 36 例中 30 例が属格形である。属格形以外の格変化形は十分な分析が行える頻度とは言えない。本稿は *i* に複数用法が有ることを指摘するが、明らかな「*i* の複数用法」は属格 *ini* が 7 例、対格 *imbe* が 1 例あるのみである。合計 8 例という出現度数は、*ini* という形式に注目して *i* の全格変化形の度数 1023 と比べれば僅かな度数であるが、実際に複数の人間を指すことに注目し、いわゆる三人称複数の人称代名詞である *ce* の度数 36 と比べるならば、決して無視できない出現度数であると言える。

2. 分析

2.1. いわゆる単数形 *i*

はじめに、単数形とされる *i* の用法を見る。

(2) *hiowande inu ini⁴ gūnin be alaha.*

「玄德も自分(=玄德)の思いを述べた」

²人間以外にも慣用的に用いられる *ini cisui*「勝手に、おのずから」は今回の分析対象から除く。1023 回は *ini cisui* を除いた度数で、すべて三人称の人間にのみ用いられている。

³なお、これら「三人称代名詞」とされる語には再帰人称的用法があることが、Gabelentz(1832:39), Adam(1873:39-41)等で古くから報告されている。実際に、『満文三國志』中の用例では 9 割以上が「自分(達)」、「みずから」と日本語訳できる。ただし、この「三人称代名詞」は主語に用いられる主格形があり、英語の *-self*、ロシア語の *себя* 等とも性質が異なる形式である。完全な reflexive と言うには議論の余地がある。この問題に関しては機会を改めて論じたいと思う。

⁴以下用例中で問題の三人称代名詞とその和訳を太字で示す。

玄德遂以已志告之。

(1 卷 33 丁表)

(3) dzY-lung ini ing de generakū uthai dergi julergi baru wame jihe.

「子龍は自分(=子龍)の陣に戻らず、直ぐに東南にむかって殺到した」

子龍不回来。遂望東南殺来。

(15 卷 21 丁表)

i の用例には、上の様に、単数の人物を指して用いられたと考えられる例が多数見られる。その一方で、複数の人物を指して用いられている例もある。

(4) tsoo-tsun, ju-dzan ambula gidabufi bucame burlame ini ing de geneci.

「曹遵と朱讚が大いに敗れて死にもの狂いで逃げて自分達(=曹遵と朱讚)の陣に戻って行く」と」

曹朱大敗。殺奔魏寨之時、

(19 卷 58 丁裏)

この例では単数形であるはずの i が tsoo-tsun と ju-dzan という二人の人物を指して用いられている。

2.2. いわゆる複数形 ce

次に、複数形とされる人称代名詞 ce の用法を見る。ce の用例は以下に示したような、複数の人物を指して用いられたと考えられるものしかない。

(5) ceni boo yamun be gemu han -i boo -i adali araha.

「(十常侍は)皆彼ら(=十常侍)の屋敷を、皇帝の宮殿のように作った」

府第依官院蓋造。

(1 卷 26 丁裏)

(6) ioo-yūn, wei-yan cembe baitalarakū ojoro jakade. gemu cira aljababi.

「趙雲と魏延は自分達(=趙雲と魏延)が用いられなかったので、二人とも顔色を変えた。」

趙雲魏延見孔明不用。各有愠色。

(18 卷 31 丁表)

用例に目を通して確実に言えることは、i が複数にも使用できる事と ce が複数にしか使用できない事である。とはいえ、複数の人物を指して用いられた場合の i と ce の用法に違

いが見られるか否かを考察せずに、「三人称代名詞には複数表示の義務が無い、i が無標である」と結論づけるのは好ましくない。

2.3. 複数の人物を指した場合の違い

i の用例を、さらに詳細に見ていくと i が複数の人物を表しているのは、i が「兵、軍」の様な集団を表す名詞を指している場合と、複数の人物を指すものの、同じ境遇において集団的に一つの意志で行動している場合との二つに限られている事が分かる。以下に用例を示す。

まず、集団を表す名詞を指している例は以下のようなものである。

(7) hūhai cooha ini geren de ertufi amcame bošome dabagan be dabaha manggi.

「賊兵が自分(=賊兵)の多勢を頼みに追撃して、峠を越えた時に、」
賊衆乗勢追趕過山嶺。

(1 卷 37 丁表)

この例で ini が指しているのは、hūhai cooha 「賊兵」である。

(8) jangliyoo hendume, ere u gurun -i cooha tulergici okdorongge. ini arga de imbe efuleki seme.

「張遼は、これは呉の国の兵が、外から(城内の内通者を)迎えようとしているのだ。彼ら(=呉の国の兵)の計略にて彼ら(=呉の国の兵)を破ろう。と言って」
遼曰。此是呉兵外應。可就計破之。

(11 卷 56 丁表)

この例で ini および imbe が指しているのは、u gurun -i cooha 「呉の国の兵」である。このように軍事上の集団である場合は i が使用可能である。

次に、一時的に単一の集団行動を行っている複数の人物を指す例を示す。

(9) yang-hūwai, g'ao-pej juwe nofi dacun loho be beye de somifi juwe tanggū cooha gaifi honin yarume nure damjalafi gajime coohai dolo isinjifi tuwaci, umai belhehekūbi. dolori ini arga de dosika seme urgunjeme

「楊懷と高沛二人が鋭利な刀を身体に潜め二百の兵を率いて羊を牽いて酒を担いで軍の中に進んだ。見れば全く備えがない。心中自分遼(=楊懷と高沛)の計略にはまると喜んで」

楊懷高沛二人。身邊各藏利刃。帶二百軍兵。牽羊送酒。直至中軍。見並無准備。心中暗喜。以為中計。

(13 卷 25 丁表)

単数形であるはずの *i* が指しているのは楊懷と高沛という二人の人物である。ただし二人は一緒に行動しており *ini arga* 「彼らの計略」は同じ一つの計略である。

(10) *jeo-i oi, lu-su* abkai erin be sarkū ofi jabšan de muse de dahame jidere niyalma bisirengge, tere *ini* hefeli dorgi jobolon, abka musede aisilarangge kai.

「周瑜と魯肅は天の時を知らない。幸運にも我々に従う者が有るが、その者(黄蓋)は彼等(=周瑜と魯肅)の腹中の災いである。天は我々を助けるのだぞ。」

周瑜。魯肅。不識天時。幸有歸順之人。為彼腹心之患。此天助吾也。

(10 卷 39 丁裏)

赤壁の戦いを前にした曹操の発言である。この例では単数形であるはずの *i* が指しているのは周瑜と魯肅という二人の人物である。ただし二人は共に呉軍の現在の指揮官として一纏めで扱われている。彼らを裏切って曹操につく約束をした「その者(黄蓋)」は周瑜と魯肅一人一人の腹の中の合計二つの災いと言うよりは、彼ら(呉軍)の中の一つの災いであろう。

(11) *g'o-en -i ahūn deo ilan nofi* niyakūrafi songgome hendume. ere weile yargiyan sefi. *guwan-lu* be *ini* boo de emu udu inenggi bibuhe.

「郭恩兄弟三人は伏して泣きながら、「この罪は事実である」と言い、管輅を自分達(=郭恩兄弟三人)の家に数日留めた。」

郭恩三人涕泣伏罪。答曰。果有此事。於是。留管輅在家數日。

(14 卷 63 丁表)

単数形であるはずの *i* が指しているのは郭恩達で、三人の人物である。ただし三人は一緒に住んでいて *ini boo* 「自分達の家」は一つの家である。なお、この例の三人は兄弟であるから、ここに挙げた他の例に比べ集合名詞的である。

(12) = (4) *tsoo-tsun, ju-dzan* ambula gidabuŋi bucame burlame *ini* ing de geneci. ing tuwakiyaha cooha. su gurun -i cooha ing durime jihe seme ebuhu sabuhū temgetu tuwa dulebure jakade.

「曹遵と朱讚が大いに破れて死にもの狂いで逃げて自分達(=曹遵と朱讚)の陣に戻って行くと、陣地を見張っていた兵は蜀の国の兵が陣に攻めてきたと慌てふためいて合図の火を燃やしたので、」

曹朱大敗。殺奔魏寨之時。看寨軍只道蜀兵劫寨。慌忙放起號火。

(19 卷 58 丁裏)

単数形であるはずの *i* が指しているのは曹遵と朱讚という二人の人物である。ただし二人は同時に同じ路を逃走しており二人が逃げ帰った *ini ing* 「自分達の陣」は同じ一つの陣地

である。

以上見てきたように i は複数の人物を指している例が有る。これらの用例では i で表わされた人物は個人個人の別個の行為は行っておらず、一つの団体とあまり違いが見られない。

次に ce の用例を見る。ce は i が複数の人物を指して用いられた例と異なり、別人格的にバラバラな行為を行っている人物を指すことが出来る。

(13) = (5) *ceni boo yamun be gemu han -i boo -i adali araha.*

「十常侍は皆自分達(=十常侍)の屋敷を、皇帝の宮殿のように作った」
府第依宮院蓋造。

(1 卷 26 丁裏)

上の例で ce が指しているのは十常侍と呼ばれる宦官の集団である。政治上の実権を手に入れて思うが儘に振る舞い、各自で行った贅沢の結果として、各々の別々の屋敷を贅沢に作っただけである。決して、自分達が共同で住む一つの屋敷を、共同で一つの宮殿のように作り上げたのではない。

(14) *dung-taiheo hendume, sini yali uncara booi buya niyalma de, ai sain arga bi seme, juwe fujin ishunde jamarara de. jang-žang ni jergi niyalma meni meni fujin sa be tafulame amasi boo de dosimbuha. ho-taiheo, dobori uthai ho-jin be helneme ganafi. ceni juwe niyalmai becuuhe weile be wacihiyame alaha.*

「董太后が「貴方の所の肉を売る家の小僧に何の良策が有るものか」と言い、両夫人³(董太后と何太后)が互いにやりあうと、張讓等各位の者は各々夫人達をなだめて後宮に帰らせた。何太后は晩にすぐ何進を呼び寄せ、自分達(=両夫人)二人が掴み合った事を、悉く告げた。」

董后曰。汝家屠沽小輩。有何見識。兩宮互相罵詈。張讓等各勸歸宮。何后連夜召進入宮。盡告其事。

(1 卷 66 丁表)

上の例で ce が指しているのは董太后と何太后である。お互いを罵倒し合って喧嘩をしている。ce で指された二人の人物の間で、明らかに対立する二つの意図が見られる。このような場合に i が用いられた例は本資料中には見られない。

³「夫人」と訳したが、満洲語の fujin は日本語の「夫人」と違い身分の高いものを表す。

(15) li-jiyo, g'o-sY ceni gaji sere hafan be bithe arafi, han de benefi ergeleme ere jergi hafan gaji sere jakade.

「李侁, 郭汜が自分達(=李侁と郭汜)の欲しいと言う官位を書に書いて、皇帝に送り、この官位をくれと強要したので」

李郭寫職銜入朝。勒要如此官品。

(2 卷 79 丁表)

上の例で ce が指しているのは李侁と郭汜である。共に皇帝の権力をないがしろにして、自分の望む官位を要求している。要求した官位は、各自の位であるうえ、同一の位ではない別の職である(李侁は車騎將軍、池陽侯、司隸校尉。郭汜は後將軍、美陽侯)。

(16) tere ucuri dorgideri jang-liyoo be gidalame waha de, funcehe cooha ceni cisui burlambi kai.

「その隙に内から張遼を殺せば、残りの兵は自分(=残りの兵)の勝手に逃げるのだぞ。」
就裏刺殺張遼。餘軍自走也。

(11 卷 54 丁裏)

上の例で ce が指しているのは「残りの兵」である。將軍が死ねば必ずから逃げると主張されている。ここで(12)と比べて重要なのは、(12)では複数の人物が一斉に自分の陣地に逃げ帰っていたが、こちらは一個所の逃走先があるわけではなく逃げ散るであろうと主張されている点である。予想される兵の行動はバラバラである。

(17) tsoo-dzun arga de tuheke be safi ekšeme bedererede, ing ni dorgi tuwa mukdeme. ju-dzan -i cooha isinjifi ceni dolo ishunde afandume cooha ambula facuhūrafi

「曹遼は策略に落ちたのを知って急いで引き返そうとすると、陣中に火が起こった。(そこに味方の)朱讚の兵がやって来たから、彼ら(=曹遼と朱讚の兵)の間で(味方同士で)互いに攻撃し合い、兵は大いに乱れて」

料知中計。便徹軍回。寨中火起。朱讚兵到。自相掩殺。人馬大亂

(19 卷 57 丁裏)

上の例で ce が指しているのは「曹遼の兵と朱讚の兵」である。共に同じ側の軍の将なのだが、(12)の一斉に同じ陣地へ逃げていく状況とは異なり、混乱して味方同士で互いに殺し合っている。ce で指された人々が対立している状態は結果的には(14)で喧嘩をしていた二人と同じであり、同じ意思を持った集団の体を成していない。

(18) yoo, šūn, ceni juse mentuhun be safi abka -i fejergi be gūwa niyalma de sirabuhabi.

「堯と舜は自分達(=堯と舜)の子が愚かなことを知っていて天下を別の人に継がせた。」

故堯舜以子不善。知天有授，而求授人。

(24 卷 41 丁表)

上の例で ce が指している「堯と舜」は二人とも中国の神話に登場する夏王朝以前の君主である。堯は子がいたが臣下の舜に跡を継がせた。舜も又、子には位を譲らずに、臣下の禹という人物に位を継がせた。堯、舜は異なる世代の人物である。もちろん、堯、舜の世襲候補であったその子供は二人の別の人物である。ここまで見てきたように ce は i と異なり集団をなさず別個に行動する複数の人物に用いることが出来る。

以上、複数の人物に対して用いられた i と ce の用例を見た。なお、ここまで挙げた i と ce の属格形 ini と ceni の用例だけでは、これらが修飾している名詞(句)の数に一致して選ばれている様にも見えるが、決して、そのようなことはない。以下の通り i の属格形 ini は、ini 自身が単数の人物を指す場合であれば、複数の異なる場所で別行動するモノを修飾して使用することが可能である。

(19) jang-jiyo ini šabisa be gūsin ninggun bade tebufi.

「張角は自分(=張角)の弟子達を三十六の場所(軍管区)に配置した。」
角立三十六方。

(1 卷 27 丁裏)

この例で ini が修飾しているのは「弟子達」である。複数の人間であり、別々の場所に配置されている。

また ce の属格形 ceni が複数でないモノを修飾している例もある。

(20) tsai-dzung. tsai-ho juwe nofi baniha bufi ceni arga de dosika sehe.

「蔡和と蔡仲の二人は感謝を述べてから、自分達(=蔡和と蔡仲の二人)の計略に(呉軍が)落ちたと言った。」
中和二人拜謝。遂為中計。

(10 卷 11 丁裏)

この例で ini が修飾しているのは、蔡和と蔡仲の二人が呉の軍に偽りの投降をするという、一つの「計略」である。蔡和と蔡仲の二人は並んで同時に投降しており(9)に似た状況だが、ここでは ini でなく ceni が用いられている。

3. 結論

三人称代名詞複数形 ce は複数のみに用いられるが、所謂三人称代名詞単数形 i は単数にも複数にも用いられる。ただし複数に用いられた用例は、同じ時に同じ場所において、同じ

意見に基づいて同じ行為をしている複数の人物、すなわち一つの集団行動を行っている人々を指して用いられたものに限られている。

4. おわりに

本稿では「所謂三人称代名詞単数形に複数用法がある」という説明を行ったが、ここで用いている西欧語的な単数と複数という概念は、満洲語に於ける単数と複数の範疇とは異なることを承知の上で用いている表現である。満洲語における単数と複数について、調査と考察が必要であろう。

本稿では資料の制約上、属格以外はほとんど考察できなかった。他の格変化形でも同様の現象が見られるのか、他の資料にも分析の対象を広げたい。

資料

『満文三國志 (ilan gurun -i bithe)』, 順治 7 (1650) 年序 Bibliothèque Nationale de France 蔵

参考文献

Adam, Lucien (1873) *Grammaire de la langue mandchou*. Paris.

de la Gabelentz, Hans Conon (1832) *Éléments de la grammaire mandchoue*. Altenbourg.

岸田文隆 (1997) 『「三譯總解」の満文にあらわれた特殊語形の来源』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

使用ソフト

木村展幸 (1998-2009) 『KIS 日本語解析システム』KisKwic for Windows, KIS (株) 漢字情報サービス.

Third Person Singular and Plural Pronouns in Manchu Version of *Romance of the Three Kingdoms*

HAYATA Suzushi

Keywords: Manchu, number, third person pronoun, collective noun

Abstract

This paper examines the so-called third person singular pronoun *i* and the so-called third person plural pronoun *ce* in Manchu on the basis of the material from the Manchu version of *San-Guo-Zhi Yan-Yi* (Romance of the Three Kingdoms), with the results that:

1. *i* is used not only for singulars but also for plurals.
2. *ce* is used exclusively for plurals.
3. *i* can be used for plurals exclusively when referent people (not necessarily a collective noun) organize a group action.

(はやた・すずし 東京大学大学院／日本学術振興会)